

# 読み方の早期強制

ジェームス・L・ハイネス



カレッジバークのマリーランド大学の教育学教授であるジェームス・L・ハイネス(James L. Hynes)は、早期読み方教育の強制することに反対の立場をとっている。

赤ん坊に読み方を教えようというのか？ この企画の主唱者は、何と途方もないことを考えているんだらう。

レディス・ホーム・ジャーナル(Ladies Home Journal)の一九六三年五月号に、当時、子どもたちや親たちに大へん不親切と思われる記事が載っていた。著者たちは主張する。

「あなたのお子さまに、読み方を教える最良の時期は……お子さまが約二歳になった時である。……もしもあなたがたが、ちょっとしたトラブルを覚悟の上でなら、お子さまが生後十八か月の

時から、また——もしもあなたがたいへん聡明であるならば——生後十か月という早い時期からはじめることもできる」と。

こんなばかげたことは、不親切どころか、偽りの祝福である。なぜなら、より早く、そして、もっと早く読み方を身につけさせ、五歳で、四歳で、三歳で、……そして、とうとう、「赤ん坊にも読み方を教えます」とまでいい出して、明らかにむりなことを自ら証明しているのである。

この素材は皮肉に書かれてはいるものの、当の著者たちは大まじめであると、読者は思うべきである。しかし、意識するとしなやかかわらず、彼らは、読み方の早期教育の「方法」と「体

系」にまったく皮肉な結論をくだしたことになる。

六歳・五歳・四歳・三歳——そして今や、この記事のおかげで、ばかげたことには、二十四か月、十八か月、そしてであろうことか生後十か月で読み方を教えるというに至った——こんなにまで急がなければならないのはなぜなのかという疑問を、両親、教師、管理者の中に生じさせたというのは、大きな効果であった。

### 個人差の無視

誰も、この論文が個人差を全く気にとめていないということに驚かない人はなからう。

「あなたの赤ん坊に読み書きを教えられる。この文章は、あなたにどうして赤ん坊に読み書きを教えるかを告げるであろう」<sup>1)</sup>あなたの“赤ん坊” あなたの赤ん坊はまだおしゃべりしていませんか？ あなたの赤ん坊はおとなしいですか？ きかん坊ですか？

どっちにしても赤ん坊は所詮赤ん坊である。赤ん坊でなければしょうがないが、人間の赤ん坊でさえあるならば、六歳でも五歳でも七歳でも、何歳の子どもでも教えられる。“こっちに当てはまることは、そっちにも当てはまる” というような単純なアプローチは、よい教育者のとる道ではない。“甲の薬は乙の毒” ということを心しておくことは賢明である。おそらく生後二十四か月で読み方を教わる用意をし、喜んで教わろうとしている子ども

はいない。しかし、四歳か五歳になれば、いくらかの子どもは読み書きを教わる準備ができ、また読み書きができるであろう。

しかしこのことは、すべての子どもがそうだとすることを意味しているのではない。また、スタートの早かった子どもが、おくの子どもよりも、より幸福であるということを知っているのではない。真に幸福な子どもというものは、彼が彼自身であるということに許されている子どもである。この論文はまた、こうもいっている。「ちっちゃな子どもたちは読み方を覚えたいと希望している」多くの母親は、彼女のちっちゃなはい回る子どもをみて、「この子ではない、誰かほかの子だろう」と笑うだけの余裕がある。

読み方のできる年齢はそれぞれの子どもの独自の時期にやってくる。

この記事を読んですぐに、「なんでそんなに急ぐのか？ なんと、そんなにあわてるのか」と即座にだれしも疑問をもった。また、この記事は、雄弁にも次のようなまいことをいっている。「子どもというものは、勉強することを狂気のように欲している……勉強することは全人生における最大の冒険である」と。

しかし、二、三歳の子どもは——指をつっこんだり、興味をもってじっとみたり、味をなめてみたり、たずねたり、さわ

ったり、眺めたりする二、三歳児なのである——このちっちゃな子どもは、決して本なんて読みたがっていないということをよく知っている。読むということは知識への道程であり、そしてすばらしい道ではあるが、間接的な代用の道である。だけれども重要な道である。しかし、読むということは知識に到達する唯一の道ではない。どうしてそんなに急ぐのだろうか。

なぜ知識を得るのにもっと他の方法を考えないのだろうか。

とくに、読むということが、子どもによってできるようになる時期がそれぞれ違うのに、また、子どもが自身でそれぞれの段階でその時期に適したすぐれた学習の道をもっているのに。この記事を読んで最後に読者がわかることは、子ども自身こそ最善の「ほんとうの本」であるということであろう。ここでは、文字通り、「鼻は足の指ではない」という貴重な教訓が記されている。早く読むということが「学問的能力の卓越性」と呼ばれているとは、

早くにできるためにはどれだけの代価を払わねばならないか

誰でもこの記事を読む人は、こんな早期に読みかたを覚えさせるにはどれほどの代価を支払わねばならないか考えるだろう。その記事の著者はくりかえし主張している「これはたとえあなたが

どんなにへたな勝負をしても、いわば、必ず勝つゲームですよ。あなたがそれに勝たないようにするためには、考えられないほどへたな勝負をしなければならないのですよ」と。

しかしどうしてそういうことがわかるのだろうか。行動の問題について、あなたは本当に罰金を払わないですむのだろうか？ あなたは何かをし、その代価はなくてすむだろうか？ 態度において、思考において、人間関係において、感情において、あなたはすべてに勝つことができるだろうか？

だれの目にもふれるような一つの値段表がすべての商品についている。すなわち、子どもを操縦すること、おとなが統制し支配することおよび人間関係のゆがみである。

「この読み方あそびは、よい子だけがしてよい。悪い子はこのゲームをしてはならない。……もし子どもが『A』といったら……その子どもにあなたが愛していることを知らせなさい。彼をほめてあげて、抱きしめることは賢明である……。さあ、魔法の階段をもう一段昇ろう、魔法の広場において、魔法の戸を開き、そして次の魔法のことばをみつけ出そう」このような態度が家庭教育の妨げになり、また、学校教育の妨げになっているのである。人工的なくふう、しかけ、馬鹿げたステレオタイプのおしゃべり、ゲーム、ワークブック、報酬、無言のおどかし、機械の利用。これらのすべては子どもがほんのちょっとおそくしさえすれば無意

味な試みをしないでできることを、少しばかり時期を早めるための試みなのである。このような無益な生活は、現在、子どもにどのような代価を支払わせているか。将来にどのような代価を要求しているか。すべてが代価なしにすみ、いつでもあなたが勝つとは、誰が信じられよう。

レディス・ホーム・ジャーナルの記事のおかげで、多分、子どもたちを質屋の質ぐさとして使わないように少しは決心するであろう。すなわち、幼稚園の五歳児を読み書きやワークブックでなやませないようにするであろう。また、ヨチヨチ歩きの子どもにアルファベットの「A」を示して、Aといわなかったら、ゆっくりに十まで数えて、あなたははつきりと、ニコニコとして、「これはAですよ、ネ、わかった？」というようなことはしなくなるだろう。

「はつきりと、ニコニコして」いわなければならぬもつとよいことはたくさんある。そのひとつは、このジャーナルの記事のみせかけの祝福であることに感謝する。今や、われわれは子どもたちをありのままにうけいれ、個性に応じた教育をし、それぞれの子どもが自分の持つてゐるすべての力を十分出すことを助け、子どものありのままの姿に満足し、さらに子どもたちがどんどん成長し、現在を嬉々と生き、未来に希望をもってたくましく成長するであろうということを信じてする仕事にもどっていくことにしよう。

(洗足学園短期大学・木原薄子)

## 新刊保育図書

### 幼児の教育原理と研究

津守 真 木原薄子編

本書は「幼児の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。幼児教育の原理から研究方法、記録、さらに制度上の問題までを、系統立てて編集したもの。最近の幼児教育の傾向を知る上にまた概論書としても適切である。

内容―第一章「幼児教育の課題」では幼児教育全般にかかわる問題を扱う。第二章「幼児教育の原理と方法」では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術など幼児教育の実際にあたってよりどころとなる論文を集めた。第三章「保育の中での研究活動」では、保育研究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。第四章「幼児教育制度をめぐって」は義務制の問題など制度上の問題を衝く論叢。

執筆者―牛島義友・及川ふみ・恩田 彰・斎藤文雄・坂元彦太郎・清水エミ子・莊司雅子・昇地三郎・鈴木正子・多田鉄雄・津守 真・樋口三紀子・日名子太郎・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂子他

A5判 四三二ページ 六五〇円

発行 フレーベル館